

厚く、最大で2m近くにもおよぶ。層厚は、丘陵先端に向かってうすくなる。

遺構は、弥生時代後期から古墳時代の竪穴住居跡（4軒以上）や古代から中世の数条の溝・柱穴群のほか、古墳時代から古代と思われる柱穴群が確認された。

## ②里道北側

谷（旧道）をはさんで西側は住吉神社跡地である。ほぼ全面にわたって遺物包含層の広がりが確認された。遺物包含層の厚さは山側でうすく、丘陵中央で厚くなる。調査区のほぼ全面にわたって柱穴群および竪穴住居と思われる遺構群が確認された。

谷（旧道）をはさんで東側では、ほぼ全面にわたって遺物包含層の堆積が確認された。包含層の厚さは山側で厚く、丘陵中央でうすくなる。山側で中世の土坑群が確認された。また、古墳時代から古代の竪穴住居群が広がり、それらを切るように走る数条の溝状遺構が確認された。



写真59 住吉神社跡地の入口

## (3) 本調査の概要

本調査は平成15年10月1日から開始し、現在、里道北側の住吉神社跡地の調査、里道南側の丘陵端部の調査を進めている。

住吉神社は、移転先の社碑によると、最後の本殿建立は元禄15年（1702）2月7日という。調査開始時には、すでに本殿や鳥居等の移転（昭和50年秋）が完了しており、わずかに石垣・階段を残すばかりであった。そこで、神社下の包含層・遺構精査に向けて、石垣等を除去中である。石垣の築造は、石積みみが谷積みであることから明治期であろう。石垣は傾斜地にあるため、石積み段数を増減して石垣頂部の水平を保っている。

里道南側の丘陵端部の調査は、包含層を除去しつつ遺構精査を実施中である。



写真60 石垣検出状況



写真61 調査の状況

## 第IV章 まとめにかえて

### 第1節 旧石器時代

平成15年度の旧石器時代調査例として、川南町赤石・天神本、中ノ迫第1、高鍋町野首第2、唐木戸第1（二次）、牧内第1（四次）、新富町の東畦原第1（四次）、西畦原第2（三次）、上新開、永牟田第1、尾小原（二次）がある。

こうした遺跡は、遺構や遺物の濃淡こそあれ、新田原・三財原・牛牧原及び唐瀬原台地の縁辺部および丘陵尾根部の緩斜面に立地し、Kr-Kb～AT下位を中心とした遺構・遺物を包含する。

#### 【石器と層序】

野首第2遺跡では、MB3下部で礫塊石器群、MB2下部～Kr-Kbでナイフ形石器群、さらにML1下部では細石刃石器群が出土し、時期ごとの石器組成や変遷、細別を迫る重要な資料を提示したと考えられる。ちなみに、AT降灰前後の包含層においては、環状に分布しているという。

また、東畦原第1遺跡（四次）では、Kr-Kbでナイフ形石器と細石刃石器群及び石鏃が伴って出土するが、上位のML1では石鏃のみという調査結果を示した。東畦原第1遺跡周辺における後期旧石器最終末～縄文時代草創期における石器組成の时期的変遷や地域性を考える上で好例となろう。

なお、中ノ迫第1遺跡でも同様な出土状況を示している。

西都～高鍋間の旧石器時代遺跡では、石器出土位置が垂直方向に上下して出土する場合が多い。層位的な出土位置や層序重視の所属時期設定に拘泥することなく、平面的な出土状況や接合関係、さらには石材分類を重視した石器群の関係把握を進める必要が生じた。

#### 【遺跡内の空間利用】

牧内第1遺跡（四次）のML2では、礫の赤化が著しく、掘り込みを持つ礫群とナイフ形石器製作に伴う石器ブロック、搔器を伴う礫群といった性格の異なる3者がそれぞれ重なることなく平面的に明瞭に分離したあり方で検出された。

この事象は、人間活動をより具体的に理解できる「空間」として認識できる可能性がある。すなわち居住（火処）、石器製作、道具を用いる作業の空間である。

これまでの調査例では、礫群と重なって石器ブロックが確認される場合が多いことを踏まえ、遺跡の立地や文化層ごとの比較検討を進めて空間利用形態や性格の違いなどを見出す作業と併行して、出土遺物相互の比較検討も重要となろう。

表5 各遺跡における基本層序と検出状況

遺跡名	ML1	Kr-Kb	MB1	MB2	MB3
赤石・天神本	—	—	○	○	—
中ノ迫第1	—	※	—	○	—
野首第2	○	○	○	○	○
唐木戸第1	—	○	—	—	—
牧内第1	○	—	○	—	—
東畦原第1	○	○	—	○	○
西畦原第2	—	○	—	○	○
上新開	—	○	—	○	○
永牟田第1	○	○	○	—	—
尾小原	—	○	—	—	—

【凡例】○：相当層にて遺構・遺物が出土  
 —：出土していない  
 ※：Kr-Kbに類似した暗褐色土以上の他、牧内第1でML2より出土

## 第2節 縄文時代

本年度は10遺跡で縄文時代の遺構・遺物が確認された。平成14年度と同様、ほとんどが早期の調査で占められており、一部に草創期および後・晩期の成果があがっている。

### ①草創期

**赤石・天神本遺跡**で草創期後半の良好な資料が確認されている。隆起線（隆帯）文土器に伴う石器群が出土しており、宮崎平野北端部における当該期の様相を示すものとして、今後の成果が期待される。

**東畦原第1遺跡（四次）**でも集石遺構1基と石器ブロック数箇所が検出された。

### ②早期

確認調査を含めた16遺跡中10遺跡で遺構・遺物が確認されており、宮崎平野北部における早期遺跡の濃密な分布状況を物語っている。ここで各遺跡について列記すると煩瑣になるため、表6にまとめた。なお表中の用語については、基本的に各遺跡の本文に準じている。

多くの遺構・遺物が検出されているが、特に集石遺構の構造・分布について興味深い成果があがった。

**野首第1・第2遺跡**では、掘り込み（深いもので確認面より70cmを超える）および扁平礫を用いた配石を有する集石遺構と、掘り込みや配石をほとんど持たない集石遺構とが同一調査区内から検出されているが、構造上の差異と遺跡における分布の差異が符合するようであり、場の機能を示している可能性がある。ただし野首第2では、A・B区の集石内から押型文系土器が出土した一方で、C区の炉穴・集石遺構の周囲からは貝殻文系土器のみが出土し、押

型文を含まないという現象が捉えられており、時期差という要素も考慮しなければならない。

野首第2では深い掘り込みを有する集石遺構から炭化材が検出された例があるため、構築年代や使用方法についても、今後明らかになると期待される。

また石鏃が散布する中に少数の集石遺構が存在する可能性があるが、小規模で短期間使用と考えられるものが多く、狩猟活動中におけるキャンプサイト的な性格を考慮すべきであろう。

### ③前期

**中ノ迫第1遺跡**で轟B式土器が出土しているほか、**野首第1遺跡**でも当該期の土器が出土している。

### ④後・晩期

**赤石・天神本遺跡**で竪穴住居跡2軒が確認された。いずれも平面円形プラン、断面皿形で、野首第2遺跡の竪穴住居跡と類似した構造を取る。検出数が少ないが、集落の一端がかかったものと推定される。

**野首第2遺跡**でも昨年度に引き続き当該期の住居跡が検出され、現時点で32軒を数える。ただし切り合い関係がほとんど見られず、出土遺物も少ないため、当時の集落景観を復元するにはさらなる検討を進めなければならない。

また今年度も翡翠製の玉が出土しているが、石質や製法から糸魚川産の可能性がある。流通ルートや過程に関してはいまだ不明な点が多いが、南九州と北陸の関係の一端を示すものとして評価できよう。

また**野首第1遺跡**でも当該期の土器が出土した。

## 第3節 弥生時代・古墳時代

本年度、弥生・古墳時代の遺物・遺構が確認されたのは、前者7遺跡、後者4遺跡を数える。ただし、

表6 縄文時代早期調査成果

遺跡No.	遺跡名	検出遺跡	出土遺物
30	赤石・天神本	陥し穴	
33	中ノ迫第1		石鏃, 石匙
41	湯牟田(二次)	集石遺構	縄文土器, 剥片
46	野首第1	散礫, 集石遺構	縄文土器(押型文系・貝殻文円筒形など), 石鏃, 石斧, 異形石器
47	野首第2	集石遺構, 炉穴	縄文土器(押型文系・貝殻文系など)
53	唐木戸第1(二次)	集石遺構, 陥し穴, 土坑	縄文土器(貝殻条痕文・塞ノ神式など), 石鏃, スクレイパー, 剥片
64	東畦原第1(四次)	散礫, 陥し穴	縄文土器(平拵式), 石鏃, 敲石, 台石, 剥片など
68	西畦原第2(三次)	集石遺構, 陥し穴, 土坑	縄文土器, 石鏃, 黒曜石片, 剥片
69	上新開	集石遺構, 炉穴	縄文土器(押型文系)
74	尾小原(二次)	陥し穴	

弥生時代は湯牟田遺跡（二次）を除き、少数の遺物や遺構が確認されたにとどまる。古墳時代では野首第2遺跡において中期を中心とした集落の調査が継続しておこなわれた。

#### ①弥生時代

**赤石・天神本遺跡**では一辺2mの小形の方形竪穴住居跡1軒が確認された。出土した甕や壺から後期後半の時期と考えられている。

**尾小原遺跡（二次）**においても壁溝を備える小形長方形プランの竪穴住居跡が確認され、覆土からは中期～後期の土器が出土した。他に床面直上から磨製石鏃も検出されている。

**前ノ田村上第1遺跡（三次）**では弥生時代終末期と推定される周溝状遺構が確認された。溝からは甕や壺、高坏のほか、石庖丁1点の出土がある。

終末期～古墳時代初頭にかかる時期の集落は**湯牟田遺跡（二次）**において確認されている。該期の竪穴住居跡21軒が検出され、うち6軒を現在までに発掘している。プランは方形を基調とし、一部隅丸方形、不定形のものを含む。多くの遺物が出土したが、線刻が入る紡錘車（SA3）、穿孔を施した石庖丁、挟入り石庖丁（SA4）などが特筆される。また、焼失住居と考えられるSA2の存在も注目される。

**中ノ迫第1遺跡**では二重口縁壺を含む多量の土器片が検出されているが、詳細は今後の調査に待つところが大きい。

そのほか、**永牟田第1遺跡**において少数の弥生土器などが確認されている。

#### ②古墳時代

先述した**湯牟田遺跡（二次）**以外に、野首第1遺跡、野首第2遺跡が古墳時代の集落遺跡として挙げられる。

**野首第1遺跡**では昨年度確認されていた竪穴住居跡（SA1）にくわえ、新たに竪穴状遺構（SX2）1基が検出された。SX2は遺物の出土状況や施設の在り方、想定される埋没過程などの点において、一般の住居跡とは異なる様相が指摘されている。出土遺物などから7世紀中頃の年代が想定される。

野首第1遺跡で確認されたこれらの遺構は、隣接する野首1号・2号墳との関連性を考慮する必要が

あり、遺跡立地や空間利用の観点からも注目される。

**野首第2遺跡**では、従来確認されていたA区・C区の古墳時代中期の集落がB区にも広がることが明らかとなった。A・C区におけると同様に、プランは方形を基調とし、面積では大形・中形・小形の3つのサイズを有するという特徴を持つ。ただし、C区において少数確認されていた切合い関係は認められない。竪穴住居跡からは叩き目の残る土師器の甕、壺や高坏などが多くみられるほか、須恵器の大甕や刀子などの鉄製品も確認された。A区の住居跡から検出された須恵器杯の編年観から5世紀末頃（TK47併行期）の年代が想定される。床面から臼玉が出土した住居跡も注目される。このほか特筆すべき出土遺物として2軒の竪穴住居跡から出土した白色粘土塊が挙げられる。こうした粘土塊は野首第1遺跡でも確認されており、今後性格の解明を期す必要がある。

#### ③まとめ

上記の弥生・古墳時代の諸遺跡について遺跡の性格や時期と立地との関係を簡単に整理し、まとめたい。

確認された弥生時代の遺跡は、大半が後期を中心に展開しており、竪穴住居などの遺構が単独で検出されるような小規模な集落の様相を示す。赤石・天神本や前ノ田村上第1（三次）で指摘されているように、集落の本体が隣接地に存在する可能性もある。

古墳時代の集落は野首第2遺跡で確認され、野首第1遺跡にもほぼ同時期の遺物・遺構が確認されている。今後、野首古墳群や隣接する山王古墳群の存在を視野に入れた総体的な検討が求められる。

あわせて、弥生時代と古墳時代の集落立地が様相を違える点についても注意する必要がある。

### 第4節 古代～中世

古代は、前年度に引き続き、**野首第2遺跡**で緑釉陶器・布目瓦が出土した。

中世は、集落・墓の調査が相次いでいる。

**前ノ田村上第1遺跡（三次）**では掘立柱建物群および柱穴群が密集して確認され、最大規模のものは14世紀前半頃の5間×2間の四面庇建物である。

銀座第1遺跡（四次）では、溝に囲まれた集落が検出されている。

湯牟田遺跡（二次）では柱穴6本をもつ土坑が確認された。

唐木戸第1遺跡（二次）は、前年度の唐木戸第2遺跡と小谷をはさんで広がるもので、主要交通路から奥まった、やや特異な立地条件をもっている。

湯牟田（二次）・銀座第1（四次）・前ノ田村上第1（三次）では、遺構規模や出土遺物から墓と推定される土坑が検出されている。副葬品も少量だが認められ、湯牟田（二次）では土師器皿・短刀が、銀座第1（四次）では土師器皿が、前ノ田村上第1（三次）では銭貨（洪武通宝）・ガラス玉が出土している。

一方で、野首第1遺跡では自然流路を含む低湿地層が確認され、14～16世紀の柄杓や曲物・扇などの木製品のほか植物種子も出土した。県内で数少ない中世期低湿地の調査であり注目される。

## 第5節 近世～近代以降

近世は集落の調査が多くみられた。

野首第1遺跡では、四周の壁面・床面に赤色土を塗った土坑からイノシシ・イヌほか多量の獣骨が出土した。最終的には廃棄坑として使用されたと考えられるが、当初の性格は不明である。この他にも廃棄坑の可能性のある土坑が検出されており、これら遺構の集落内配置・性格の解明が期待される。

前ノ田村上第1遺跡（三次）・銀座第1遺跡（四次）の掘立柱建物柱穴からは、寛永通宝ほか銭貨が重なって出土した。地鎮め等の性格が考えられる。

なお、中・近世の遺構と重複して、宮ノ東遺跡の住吉神社跡地等、複数遺跡で近代以降の遺構・遺物等が確認されている。

今後、中世・近世ともに、重複した遺構群を時期別に分離することが、まず求められよう。

## 報告書抄録

ふりがな	ひがしきゅうしゅうじどうしゃどう (つの～さいとかん)
書名	東九州自動車道（都農～西都間）関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書IV
副書名	
巻次	
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第91集
編著者名	吉本正典 堀田孝博
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター
所在地	〒880-0212 宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地 TEL 0985-36-1171
発行年月日	2004年3月19日

---

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第91集

# 東九州自動車道(都農～西都間)関連 埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅳ

2004年3月19日

編集行 宮崎県埋蔵文化財センター  
〒880-0212 宮崎県宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地  
TEL 0985-36-1171 FAX 0985-72-0660

印刷 有限会社 鉦脈社  
〒880-8551 宮崎県宮崎市田代町263番地  
TEL 0985-25-1758 FAX 0985-25-7286

---